

二〇二五年度

適性検査型 第一回 入学試験問題

適性検査Ⅰ（五十分）（全四ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 解答用紙は二枚です。試験開始の指示と同時に、二枚の解答用紙に受験番号と氏名をそれぞれ書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはつきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

□ 次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

(\*印のついている言葉には本文のあとに「注」があります。)

まず、戦後の民主的な社会で驚異的な経済成長を成し遂げ、一時的にせよ「一億総中流社会」を実現した日本では、平等幻想が浸透したが、その後格差が拡大するにつれて、この幻想を持ち続けるのはきわめて困難になった。もはや\*風前の灯といっても過言ではない。

皮肉なことに、戦後の民主的な教育によって「みんな平等」とわれわれが教え込まれ、平等幻想が浸透したからこそ、ちよつとした差に敏感になったという側面も否定できない。

この点を指摘したのは、19世紀のフランスの思想家、アレクシ・ド・トクヴィルである。トクヴィルは1805年生まれだが、彼の両親は貴族だったので、フランス革命が1789年に勃発したときギロチンで処刑されそうになったという。そういう家庭環境もあって、20代でアメリカに渡り、精力的に現地の社会を見て回って書き上げたのが『アメリカのデモクラシー』だ。

この著書で、トクヴィルは次のように述べている。

「私が考えたところでは、平等が人々に約束する幸福を予告しようとする人はたくさんいるであろうが、それがいかなる危険に人々をさらすか、これをあえて早くから指摘しようとするものはほとんどいないであろう。私が目を向けたのはだから主としてそうした危険であり、これをはっきりと見出したとき、\*臆して口を噤むことはしなかった」

①さすがに先見の明があったと思う。たしかに、「みんな平等」という考え方が浸透するほど、「同じ人間なのに、なぜこんなに違うのか」という思いにさいなまれ、歯ぎしりせずにはいられなくなる。また、「あいつはあんなに恵まれているのに、なぜ自分はこの目に遭わなければならないのか」と怒りを覚えることもあるはずだ。それをトクヴィルは200年も前に見抜いていた。

歯ぎしりも、怒りも、「みんな平等」という考え方が浸透し、他人と自分の間に残る違いにより敏感になったことよって一層激しくなった。江戸時代のように歴然たる身分の差があった時代なら、違いがあってもそれほど気にならなかった。いや、より正

確には、あきらめるしかなく、気にしていられなかったというベ  
きだろう。

ところが、平等化が進むにつれて、ちよつとした違いに敏感に  
なる。もともと別の世界の「違う人間」だと思えば、違いがあつ  
ても腹が立たなかったが、現代のわれわれは「同じ人間」だとい  
うことを刷り込まれているので、あきらめきれない。だから、少  
しでも違いがあると許せない。

とくに、日本は「一億総中流社会」をかつて築き上げたことが  
あり、その頃に浸透した「みんな平等」という意識がいまだに根  
強く残っている。もちろん、それ自体は悪いことではない。だが、  
最近はずし「みんな平等」とはいえない現実を思い知らされ  
る機会が増えているにもかかわらず、平等幻想だけが漂っている  
ので、「平等なはずなのに、なぜこんなに違うのか」と不満を抱か  
ずにはいられない。

こうした不満は、\*羨望を生み出しやすい。だから、羨望で胸  
がヒリヒリするような思いをしながら、②羨望の対象が転げ落ち  
るのを今か今かと待ち構えている。ところが、なかなかそうなら

ないので、待ちきれなくなる。そこで、しびれを切らして、羨望  
の対象を少しでも不幸にするために不和の種をまいたり根も葉  
もない噂を流したりするのだ。

とりわけ、自身を過大評価していて、「自分はこんなに優秀な  
のに、能力を正當に評価してもらえない」「自分はこんなに頑張っ  
ているのに、努力をちゃんと認めてもらえない」などと\*承認欲  
求をこじらせている人ほど、「平等なはずなのに、なぜこんなに違  
うのか」と不満を募らせやすい。羨望の対象が周囲から認められ、  
高く評価されているのは、元々の能力に加えて本人の努力のため  
ものだったとしても、そういうことは目に入らないのか、③不公  
平だと不平を漏らす。

このような不満を抱えていると、「努力しても報われない」「頑  
張ってもはい上がれない」などと思ひ込み、地道な努力をコツコ  
ツと積み重ねようとはしない。努力もせず、不平ばかり漏らして  
いたら、承認欲求が満たされるわけがない。だから、ますます腐  
ってしまふ。そうになると、陰で他人の足を引っ張るようなま  
いを繰り返すわけで、こうした悪循環に陥ったら、なかなか抜

け出せない。

(片田珠美「職場を腐らせる人たち」による)

〔注〕 風前の灯かぜのとう——風に吹かれる蝋燭の炎のように、

今にも消えそうで儂いことのとたえ。

臆して口を噤むおくしてくちづむ——臆病になって黙ること。

羨望せんぼう——羨ましく思うこと。

承認欲求しんじゆききう——自分を価値ある存在として、他者から認められたいという願望。

〔問題1〕 ① さすがに先見の明があったとありますが、

筆者が「先見の明があった」と考える内容とはどのようなことですか。本文中の言葉を使って六十文字以内で説明しなさい。

〔問題2〕 ② 羨望の対象が転げ落ちるのを今か今かと待ち構えている

とありますが、「羨望の対象が転げ落ちるのを

今か今かと待ち構えている」者が見えなくなるのはどのようなことですか。本文中の言葉を使って五十文字以内で説明しなさい。

〔問題3〕

③ 不公平だと不平を漏らすとありますが、あなたが「不平を漏ら」した経験をふまえ、今後は、何に気づきどのように行動していこうと考えますか。本文をふまえて、あなたの考えを、三百字以上四百字以内で書きなさい。ただし、あとの「手順」と「きまり」にしたがうこと。

〔手順〕

- 1 あなたが「不公平だと不平を漏ら」した経験を、本文をふまえて書く。
- 2 「手順」1で書いたことと、本文で書かれていることと比べて、あなたが気づいたことをまとめる。
- 3 「手順」1と2をふまえ、あなたはこれからどのような行動していこうと考えるかを、具体的に書く。

「ぎまり」 ○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○、や。や「なども、それぞれ字数に数えます。

これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。(ますめの下に

書いてもかまいません。)

○。と「が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「。で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○最後の段落の残りのますめは、字数として数えませ